

城北会千葉支部会誌

第2号

平成 17(2005)年 10 月

城北会千葉支部

はじめに

この度、城北会千葉支部会誌第2号を刊行することになりました。
ここにお送りいたします。

昨年、会誌第1号が前支部長の齋藤和子さん（S29年卒）のご尽力により発刊することが出来ました。

私は昨年の千葉支部会の集まりで齋藤和子さんのご指名があり、当日ご出席の皆様のご賛同を得まして支部長を引き受けることとなりました。

今後、齋藤和子さんには顧問というお立場でご指導をいただき、副支部長には齊藤徳浩さん（S32年卒）本橋輝明さん（S34年卒）にお願いしまして支部活動を引継いで行うことといたしました。

私が支部会に参加するようになりましてのは15,6年程前のことで、当時城北会の理事会での席上で大槻清彦先輩（S11年卒）より声をかけられ、「君は千葉県にお住まいなのでぜひ支部会にも参加してほしい」とすすめられ出席するようになったものです。

第2号は昨年の支部会での森岡恭彦先輩（S24年卒）の講演の内容の紹介、田村耕三先輩（S16年卒）の千葉支部会の発足当時の話をまとめました。

会員からの寄稿（話題、形式は問わず）を掲載したいと考えておりましたが今回は準備不足でした。

今後は皆様にぜひお願いをして寄稿をふやしたいと考えておりますのでご協力をお願いいたします。

平成17年10月

城北会千葉支部

支部長 尾崎英二

「わが国における外科の曙」 森岡恭彦氏 (S24)

平成 16 年 11 月 6 日 (土) 於：市川市 八幡会館



現在： 東京大学名誉教授
自治医科大学名誉教授
日本赤十字社医療センター名誉院長
日本医師会参与

座長：齋藤支部長

森岡恭彦先生をご紹介申し上げます。先生との交流の始まりは、ともに 1966 年度の日仏技術交流プログラムによってパリで研修した同期生であるということです。7 月から 9 月までの 6 週間、フランス中部の温泉保養地ヴィシー市（ペタンのヴィシー政府）のホテルに分宿して“プレ・スタージュ”（語学の仕上げ）を受けました。他にもプレ・スタージュの場所はあるのに日本からの医学関係の研修生はヴィシーに集められていました。そのときは戸山の先輩であるとは知りませんでした。その後パリに出てきましたが、プレ・スタージュ仲間は一緒に食事をしたり、旅行をしたりしたものです。ラジオの一日の終わりに、ド・ゴール大統領の「ヴィヴラ フランス！（Vive la France フランス万歳）」が流れていた頃です。本日はその縁をもって記念講演をお願いいたしました。なお、ご略歴は下記の通りです。

略 歴

- 1930 (昭和 5) 年 8 月 25 日生 出生地：東京
- 1943 (昭和 18) 年 4 月 府立第四中学入学
- 1949 (昭和 24) 年 3 月 都立第四新制高校（都立戸山高校）第 1 回卒業
- 1955 (昭和 30) 年 3 月 東京大学医学部卒業
- 1960 (昭和 35) 年 3 月 同大学 大学院生物系第三臨床医学過程終了
- 1966 (昭和 41) 年 7 月 同大学 医学部第一外科助手
- 同 年 7 月 日仏技術交流プログラムによりフランス留学
- 1972 (昭和 47) 年 4 月 自治医科大学消化器外科・一般外科教授
- 1981 (昭和 56) 年 6 月 東京大学医学部第一外科教授
(1986 年 4 月～1988 年 3 月 同医学部付属病院長兼任)
- 1991 (平成 3) 年 4 月 労働福祉事業団 関東労災病院長
- 1994 (平成 6) 年 9 月 日本赤十字社医療センター院長
(1996 年 4 月～1998 年 3 月 日本医師会副会長兼務)
- 1998 年 4 月 日本医師会参与となり現在に至る。
- 2001 (平成 9) 年 10 月 日本赤十字社医療センター名誉院長となり現在に至る。

森岡恭彦氏講演「わが国における外科の曙」

はじめに

1966年に私はフランスに留学しましたが、当時齋藤和子さんと一緒に楽しく過ごさせていただきましたご縁もあって、今回参上しました。

この地は永井荷風が戦後住んでいて、「大黒屋」という食堂でよくカツ丼を食べていたというので、彼の旧居を訪ねたりそこへ食べに行ったこともあって、このへんの地理も少しは知っています。

今日は外科の話をする事になっていますが、特に歴史の話をしたと思います。

今年（平成16年）1月17日、戸山高校の「土曜講座」で生徒に外科の話をしたので、今日もまた同じような話で、すでにお聞きになっている人はご容赦ください。

以下スライドを使って説明します。

日本人の書いた最初の外科書

日本の外科というのは、16～17世紀頃に西洋から日本にやってきたポルトガル人やオランダ人を通じて入ってきました。最初は宣教師を通じてでした。

ところで、1705年に長崎の榎林鎮山という通詞（通訳）が書いた「紅夷外科宗伝」という本があります。これは後に話すフランスの床屋外科医のパレの書いた本のオランダ語の訳本をもとに、鎮山がオランダ人外科医から聞いたことなどを参照して書いた日本最初の外科の本です。今から約300年前のことです。



この写本がいくつかあって、長崎大学医学部の図書館が保存している本は同図書館の第1号となっています。

近代外科医の父：アンブロアズ・パレ

その書にはいろいろの図があって、天秤棒みたいなものを肩の下に入れて担ぎあげ、肩の脱臼を治しているものがあります。

この絵は一見して 16 世紀のフランス人の床屋外科医アンブロアズ・パレという人が書いた本から模写したものであることがわかります。パレは貧しい片田舎の生まれではじめは床屋だったのですが、そこから成り上って特に戦場で腕を揮い、王様の信用を得て有名になり、外科の本を書いたりしました。

ところが彼はラテン語を知らないのでフランス語で書き、それに絵をたくさん付けた外科全書は評判になり、やがて 6ヶ国語に翻訳され、当時の西欧の外科医に広く読まれていました。そのオランダ語訳が日本に入ってきて、鎮山らはこれを基に外科書を書いたわけです。アンブロアズ・パレの書が発行されてからすでに 100 年経っていました。

当時利用されたアンブロアズ・パレのオランダ語訳の本が日本に残っているかということ、現在では緒方洪庵の開いた大阪の適塾に唯一保管されています。東大の図書館にもあったようですが関東大震災で焼けてしまい、現在はこれ一冊しか残っていません。

また、当時日本人が書いた外科の本が 2, 3 ありましたが、それらの本も構成や図からしてアンブロアズ・パレの書の翻訳書を参照したことは確かです。

従って、日本の外科のルーツといえ、フランスの床屋外科医のアンブロアズ・パレの書いた本ということになります。

パレの書には図が多く、例えば槍が刺さったときに、「刺さったときの方向にそって抜け」というようなことを図をもって示しており、非常にわかりやすい絵で描かれています。また義足なども描かれています。

昔は医者というと外科と内科の区別がなかったのですが、ヨーロッパの中世では外科はほとんど床屋がやっていました。その他手術は僧侶なども行っていたのですが、中世の中頃になるとキリスト教では血を見るような生々しいことはしないということになりました。ところで床屋というのは顔を剃ったりするのでお客を傷つけることがある。そうすると傷の手当をしなければならぬ。そんなことでけが人が出ると床屋に担ぎ込むようになって、床屋がだんだん外傷を治す医者のような役割をするようになって来ました。

また一方で中世ヨーロッパでは大学が出来てきましたが、そこでの医師は古代ギリシアやローマの昔の医学の本を読んで薬の調合をしたりしていました。実際、手術になると大学の先生はほとんど手をつけず、床屋を呼んできて「そこを切れ」というような指示をしていた有様でした。

ところが戦争になると大学で勉強した先生は役に立たない。床屋外科医が手術をしたり傷の手当をするわけで、床屋外科医がそれなりに力を持っていました。アンブロアズ・パレも床屋外科医として戦争に行つて功績を挙げ、当時の王様の信頼を得て 4 代の国王（アンリ II 世とアンリ III 世の 3 人の息子、すなわちフランソワ II 世、シャルル IX 世、アンリ III 世の 4 代）に仕えました。

この絵（版画）では左のベッドの上にアンリ II 世が臥しています。娘のエリ



ザベートがスペイン王フェリペ II 世に嫁いだときの祝宴の騎馬試合で、両方から槍で突き合う競技をやったときに、たまたま相手の槍がアンリ II 世の眼に刺さってしまいます。そのときにアンブロアズ・パレと、医者の世界では初めて本格的な解剖書を出版したことで有名なヴェサリウスという人と二人が対診しています。王はやがて没します。

またアンブロアズ・パレは4代の国王に仕えましたが、その一人フランソワ II 世が中耳炎にかかり、その後脳に膿が溜まり危篤状態になりました。その膿を出さなければ命が危ないといので、パレは頭を開けて膿をとることを主張したことがあります。もちろん当時彼は何度もそういう手術をしていました。

カトリーヌ・ド・メデシスというイタリアから嫁いできたアンリ II 世の奥さんが見守る中、その息子のフランソワ II 世（アンリ II 世とカトリーヌ・ド・メデシスの第一子、長男）はベッドに寝ている。その真ん中にアンブロアズ・パレが立っていて、「手術をしないと死ぬことになります」と言っている場面を描いた絵があります。

この状況はバルザックやメリメなどが小説に書いていますが、パレはもし手術がうまくいかなければ自分の命はないという悲壮な決意をもって、それでも「手術が必要だ」と主張する、そういう場面で、名場面と言えましょう。

結局は「王様の頭に穴をあけるとは何事だ」というので手術はできませんでした。フランソワ II 世は間もなく死にます。

ラヴァル市にあるパレの医跡を NHK が取材

フランスの新幹線である TGV でパリからボルドーに向かう最初の駅がル・マンというオートレースで有名なところで、その次にラヴァル (Laval) という駅があり、ここがパレの生地です。その市役所の前にアンブロアズ・パレの銅像があります。

パレが死んでから 400 年になる今から 10 年くらい前に、「日本の外科はアンブ

ロアズ・パレの本が入ってきたときに始まるのだから、[アンブロアズ・パレ没後400年祭]という会をやろうと言う声上がり、NHKに話してそういう番組をつくることになりました。早速取材のためにNHKの人とパレの生地ラヴァルに行ったことがあります。ここでも400年祭が行われており、先方の市長が駅まで花束を持って迎えにきたので驚きました。

実は、到着前にある人が「用心のためにネクタイをしていたほうがいい」と言ってくれたので一応それなりの格好をしていましたところ、案の定駅に着いたら市長のお出迎いで、危ういところを助かったという思い出もあります。

地元の新聞に、「4代の国王の侍医を勤めたアンブロアズ・パレと、天皇の手術をした日本の外科医との邂逅」という記事が出て、びっくりしました。

そのときに、「そうではないんだ。実はオランダ語に訳されたパレの書が日本に入ってきて、それで我々の先祖の外科医は勉強したのだ」と説明しました。その翌日の新聞を見ると、「オランダ人よ、有難う」と書かれていたのでやっと私たちのことを分かってもらえたようでした。

そのときに、何かラヴァル市に記念品を贈ろうと考えているうちに、あるフランス人が「トロー」がよかろうというのです。何かと思ったら「燈籠」のことでした。石燈籠というのは関東では筑波山の麓の真壁というところで作られていることが判り、千葉大学の外科教授の奥井先生やその弟さんらと、お知り合いの神社でお祓いをしてから贈るということになりました。

燈籠がラヴァルに無事建てられるのかどうか心配でしたが、分解して送ったものは確かにちゃんと当地に建てられ、ほっとしました。



その除幕式の写真ですが、一番右の人はパリの日本大使館の人、その次は私がパリにいた時の同僚のフランス人の外科医、当時パリに留学していた私の東大の後輩の富永先生、一番左はラヴァルの市長ということです。

その後これを見に行ってきた人の話では、まず市役所に行って「燈籠はどこ

にあるか」と聞いたら丁寧に教えてくれて、よく来てくれたということでご馳走になったということです。また、ある女性が訪ねていったところ地方新聞に記事が載り、それを拝見したこともあります。

アンブロアズ・パレという人は敬虔なクリスチャンで、彼は幾つかいい言葉を残しています。「私が処置し、神がこれを治し給うた (Je le pansay, Dieu le guarit.)」——この言葉は外科医にとって非常に謙虚な言葉であって、私たちへの戒めの言葉でもあります。私たちは手術をして大抵はうまくいくわけですが、時には患者さんは合併症を起こしたりしておかしくなることもあって、手術の後は神に祈る気持ちを何時も感じています。

昭和天皇の手術

かって私が昭和天皇の手術をしたときに、朝日新聞に勤めている中学（現戸山高校）の同級生が、「手術した後、絶対に俺のところに電話してくれ」といつて来られたのですが、手術した後すっかり忘れていました。一週間くらいして今度は「手記を書いてくれないか」というのです。「まあしょうがないな」と思いながらも、新聞記者というものは、本当でないことを平気で書くから危ないし、個人のプライバシーもあるので、当たり障りのないことを書くしかないと考え、そのときにこのアンブロアズ・パレのことや彼の名言を使わせてもらいました。「私が処置し、神がこれを治し給うた」——私はこういう処置をして、あとは神に祈る心境である、というわけです。実は、先ほどのラヴァルに贈った石燈籠にもこの言葉が刻んであります。

外科というのは確かに血なまぐさいもので、内科に比べればより厳しい職業ですね。

西洋医学の変遷

そもそも西洋医学というものは、古代ギリシア・ローマから始まっています。中世になると混乱期があって、西欧は暗黒時代に入ります。そしてほとんどのギリシア・ローマの医学はアラビアの方に移ってアラビア語に訳された本が出ます。

12～13世紀になって西欧社会も少し落ち着いてくると医学部ができたりして、いったんアラビア語に翻訳されたギリシア・ローマの医学がもう一度西欧に戻って復元されます。

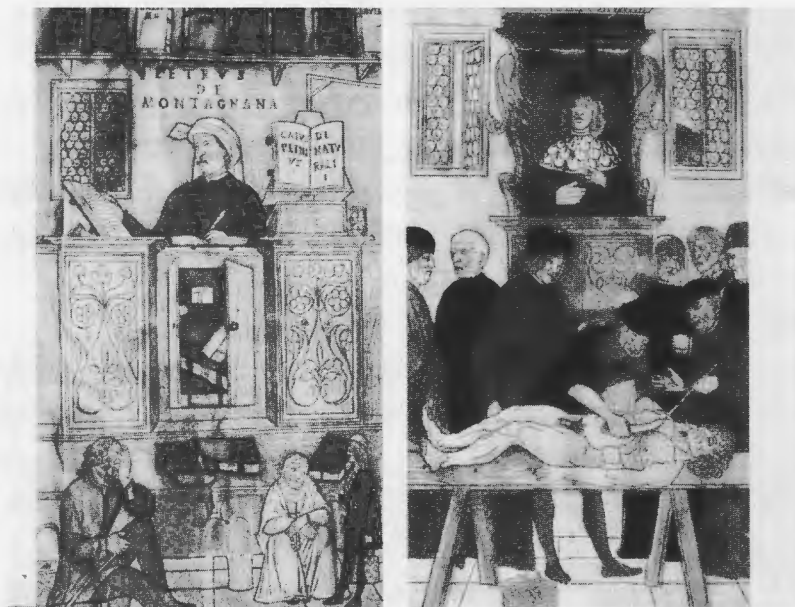
当時西欧の大学の医学部では古代ギリシア・ローマ医学の翻訳などが主体で、前に述べましたように、実際の外科の技術は床屋外科医にやらせていました。もちろん床屋外科医以外にも教会の牧師などがやったりしていました。

床屋外科医は実際に手術はするが学問がない。そこで医学部の医師と対立が起きる。そのうちに外科医も集まって勉強しなければいけないということで学校をつくる。パリでは「サン・コーム (St. Côme)」という中世の聖人の名前をつけた学校ができ、床屋外科医は勉強をして医学部の医者に対抗します。

この対立は長く続いたが、フランスではフランス革命の後、ナポレオン I 世のときに合体し、医学部の中で外科の教育、外科医の養成も行うということになりました。それまで 300 年以上の対立が続いたことになります。

ドイツでもイギリスでも同様で、床屋外科医と医学部医師の対立が長いこと

続いていたということです。



この絵は当時の死体解剖の様子を示したものですが、右の長衣を着た医師が死体の臓器を示している。一番上に偉い先生がいて、「これは肝臓だ、これは心臓だ」と教えています。実際に解剖をしているのは短衣を着た床屋外科医で、長衣を着けた偉い先生に「あそこを切れ」と指示されて、その通りにやっているわけです。

今でも外科医というと頭を使わないで手だけで仕事をやっていて、内科の先生にバカにされているような傾向がないことはないようです。

私がなぜ外科医になったかという、本を読んだり勉強したりすることはあまり好まない、外科医になってやろうという気持ちがあったように思います。私のクラスの成績の優秀な人はだいたい内科に進んだようで、今でもそういう傾向があるような気がしています。

わが国への医学の伝来

日本の医学はどのようにして発展したかを考えると、先ず本格的な医学は遣唐使や中国から帰来した人たちによって輸入され、彼らの役割が大きい。特に鑑真和上などが中国の医学を日本にもたらしたことはよく知られています。

では日本本来の医学はどうかというと、「因幡の白兔」のように、蒲の穂でやけどを治したという話などありますが、それ程のものではありませんでした。

本当の医学らしいものが入ってきたのは中国からで、中国の医学といえば「漢方」と呼ばれ、漢方薬とか鍼灸が広く使われてきました。

16世紀になるとポルトガル人が来るようになります。最初に「南蛮外科」（南蛮：ポルトガル）といって「外科」を伝えたのはアルメイダというポルトガル人の宣教師で、大分に病院をつくりました。これが日本最初の病院とされ、今でも大分に行くと「アルメイダ病院」という名前のついた病院があります。しかし、アルメイダについての文献は日本にはほとんどないので、どんな治療をしていたのかはよく分っていません。

その後日本は鎖国政策をとり、長崎の出島に来るオランダ人との交易しか許されなかった。出島に来るオランダ人から伝わった外科、つまり「紅毛外科」（紅毛：オランダ）が入ってきたのです。

そしてそのオランダ人の通訳をしたのが植林鎮山らで、そういう人たちが通訳をしながら外科医学を学んで外科医になったわけです。

また江戸時代も半ばを過ぎると解剖が重視され、これが西洋医学の発展の基になりました。解剖学というのは漢方ではほとんど必要ではなかったのです。

解剖学、蘭学に道を開いた杉田玄白

日本で最初に本格的な解剖学の本を翻訳、出版したのが**杉田玄白**と**前野良沢**で、彼らが1774年に出版した西洋の解剖学の書の訳本である「解体新書」は西洋医学（蘭学）の発展に大きな貢献をしました。今でも「買いたい新書」、「大学解体新書」などという言葉が使われているように、この書の名前は広く知られています。

この本はもともとドイツ人が書いたもののオランダ語訳で、偶然に杉田玄白と前野良沢らが持っていたのです。

この二人は小塚原（今の南千住近辺）の死刑場に行って死体解剖を見学し、この本に描かれている絵と見比べてみると、なるほどその通りであるというので感激してその書の翻訳に取り組みました。

西洋の死体解剖の本は杉田玄白が訳したこの書が有名ですが、実際にはその前にも解剖書の一部は訳されていました。しかし本格的な解剖書をちゃんとした訳にして出版したのは杉田玄白らでした。

日本で公に許可されて死体解剖を行ったのは1754年、京都で山脇東洋が最初とされています。死体解剖の許可を取るのが難しかったのです。

今の南千住に回向院というお寺があり、前に述べたように杉田玄白らがこの近辺で死体解剖を見学して訳本の出版を決意しましたので、これが解剖医学の出発点だということで碑文が壁に見られます。

杉田玄白という人はもともとオランダ語を知らなかったもので、実際に翻訳を指導・指揮したのは前野良沢でした。この人は大分の出身で、長崎でオランダ語を勉強していました。

ところが「解体新書」を訳した人の名前の中に前野良沢の名前がありません。なぜないのか。これにはいろいろ憶測があります。杉田玄白が前野良沢を嫌って名前を落としたのではなく、どうも前野良沢自身が辞退したと考えられます。この本には誤訳が多くて、彼は非常に厳格な人で、名前を載せるのを断ったのではないかともいわれています。

またその付図を描いたのはまだ若かった**小野田直武**という秋田・角館出身の人です。**平賀源内**が角館に立ち寄ったときにある庄屋で見初めて、「見込みがある」というので江戸に連れてきて西洋画の勉強をさせていました。そのときに、恐らく平賀源内が彼を杉田玄白に紹介したのだらうと思われれます。

杉田玄白は小野田直武が絵を描いてくれたことについては一言も触れていません。ただ、「解体新書」の序文のところに、「私は友情に応じて若輩ながら絵を描かせてもらった」という直武の言葉が書かれています。玄白はおそらくこ

れは模写なので、画業のことは重視していなかったのでありましょう。

小野田直武はその後郷里に帰り、佐竹藩に仕え 32 歳で死んでいます。角館には直武の小さな墓があります。

前野良沢の墓は現在杉並にあります。

全身麻酔を開発した華岡青洲

千葉大学の第一外科の教室に「獅胆鷹目以女手」という書が懸かっています。手術というのは「大胆に、しかも鋭い眼で見て、女性のようなやさしい手で行え」ということが強調されていました。これは 16 世紀のフランス人の言葉で、特に麻酔のない時代には大切な言葉でした。



江戸時代の手術ですが、麻酔のない時代のことで大変でした。この絵は手を切断しているところですが、患者があばれるのでみんなで押さえ込んでいます。

ところで 1805 年に、漢方と西洋医学の両方を学んだ**華岡青洲**という和歌山の人 が漢方薬を調合して全身麻酔を考え、乳癌の手術をしたことがよく知られています。

この内服薬による全身麻酔というのは薬の調合がむずかしくて危険性がある。それで母親とか奥さんを実験台に使って失明させたりして大変な苦勞をした様子を書いた有吉佐和子の小説があって、テレビでも放映されて有名になっています。全身麻酔下の手術としてはこれが世界で初めてのものとされています。

その後ガス麻酔が使われるようになり、エーテルやクロロフォルムや笑気が使われるようになりました。アメリカでエーテル麻酔が初めて行われたのが 1846 年で、それからまだ 160 年くらいしか経っていません。

華岡青洲の麻酔術は確かに当時では画期的なことでした。しかし薬の調合が非常に難しく、華岡青洲自身も信用のできる医者でないと教えなかったこともあって、一般にあまり普及しませんでした。

彼は全身麻酔をかけて乳癌の手術を約 150 例行っています。弟子の中でこの方法を使って一番多く手術を行った水戸の**本間玄調**という人が知られています。ごく最近になって、杉田玄白の息子（養子）が行ったという記述が書かれた書のある先生が神田の古本屋で見つけたという記事が出ていましたが、他に何人かの人がこの方法で手術をしているものと思われま

す。華岡青洲が手術をした患者の名前のリストがあって、ある麻酔科の教授がこれを基に和歌山周辺のお寺の過去帳を調べて、手術を受けた人たちがいつまで生きていたか調査し、3 年かかって 30 例ほど突き止めたという話もあります。

その先生は大変に凝った人で、当時の麻酔薬を調合して動物実験を行ったのですが、ネズミやイヌでやってみたが麻酔効果はなかったとしています。最後に勇ましい医師が自分で試してみたが、ある程度の麻酔作用はあったということです。

現在では、ガス麻酔や薬物の注射で患者は痛みを伴わず手術を受けられるようになっていて、花岡青洲の話も昔話になっています。

手術のもう一つの重要な課題は感染の問題でしたが、ここではこの話は省かせていただきます。

幕末の日本の医学に貢献したシーボルトとポンペ

幕末になるとオランダ医学が盛んになり、特にオランダの医者で**シーボルト**という人は 6 年くらい日本にいて多くの弟子を育てました。彼は長崎丸山の芸者と結婚して子供までつくったりしています。彼のお弟子さんとして 100 人ほどの人が名を連ねています。そういう人たちが日本でのオランダ医学を進歩させる役を果たしました。

それからしばらくして幕末に**ポンペ**という人が長崎にやってきました。この人も教育に熱心な人で本格的な医学教育を行い、弟子も数多く、特に幕末に活躍しています。

ただ、弟子といってもいろいろで、何日間か講義を聴いただけで弟子になったりしていたり、聴講したということ証明する文書を役人や通訳に頼んだりして入手したということもかなりあったらしいのです。

しかし、シーボルトとポンペの二人が幕末から明治にかけての日本の医学に大いに貢献したことは間違いありません。

シーボルトは日本の植物学などにも興味をもち、当時輸出してはいけないといわれていた地図を持ち出したりし、それらを積んでいた船がたまたま長崎で難破して露見して、シーボルトは国外に追放されます。

種痘を広めた伊東玄朴と東京大学医学部

江戸末期になり、医学の上で大きな進歩の一つは「種痘」でした。種痘はイギリスのジェンナーが牛の天然痘、いわゆる「牛痘」を植え付け、成功したものです。もちろんその前にも人の天然痘、いわゆる「人痘」の接種が行われていました。しかしこれは危険性が高く、うまくいかなかったのです。

日本ではさきほどのシーボルトも種痘を日本に紹介しましたが失敗しています。1848 年にオランダの医師モーニッケが日本に痘苗を持ってきたがうまくいかず、翌 1849 年に新たに取り寄せた痘苗によりやっと成功しました。以後、

種痘は急速に広まるようになりました。

伊東玄朴は鍋島藩（今の佐賀県）出身の人で長崎でシーボルトに学び、後に江戸で開業した蘭方医ですが種痘を広め、当時なお劣勢にあった蘭方医の勢力を高めるために1858（安政5）年、江戸・お玉が池に「種痘所」をつくりました。後に幕府もこれを接收し、明治政府もこれを引き継ぎ、「西洋医学所」としました。東大の医学部はこれから発展したもので、伊東玄朴の功績は非常に大きいといえます。

伊東玄朴は57歳のときに徳川十三代将軍家定の病気について拝診しました。これまで将軍の侍医はみな漢方医でしたが、そのときにどうしても漢方では治らないというので玄朴が呼ばれたのです。玄朴は患者を往診しているところをつかまって江戸城に連れて行かれ、将軍を拝診したということです。

私もちょうど同じ歳（57歳）で昭和天皇の手術をいたしましたので、なにか因縁めいたものを感じています。

玄朴は将軍家定を拝診して、「これは治らない。3日くらいすると死ぬだろう」と言ったとされ、実際その通りになりました。それから信用を得て、御殿医として召抱えられています。蘭方医として初めて将軍の侍医になったのです。

伊東玄朴の旧宅は佐賀市のちょっと外れにあり、現存しています。

また神田岩本町の交差点近くには「種痘所」の跡を示す石碑があります。昔はお玉が池と言われたところで、千葉周作の道場などもあったところです。



この「種痘所」は半年ほどで火事で焼けてしまい、今の三井記念病院（千代田区神田和泉町、秋葉原と浅草橋の間）の近くに移転しますが、これが発展して東大医学部になるわけです。

伊東玄朴は池之端などで開業し大繁盛し、多くの弟子を育てましたが、幕末の江戸開城の直前にさっさと荷物をまとめて横浜の方に引っ越してしまいました。お墓は谷中の天龍院にあります。

幕末に活躍した外科医たち

幕末に活躍した蘭方医、外科医はその他に何人かいます。その一人が大阪で「適塾」を開いた緒方洪庵です。この人は長崎でオランダ人のニーマンに学んで、後に大阪に「適塾」を開きました。ニーマンという人は医者ではないのですが、洪庵はニーマンからいろいろの学問を学び、洋学を広めるために塾を開き、多くの人材を育てたのです。

もう一人は**佐藤泰然**という人で、千葉県の佐倉の「順天堂」の創始者です。この人は長崎でニーマンに学び東京に塾を開いたのですが、佐倉の殿様に引張られて佐倉に移りました。順天堂では数多くの蘭方医が育っています。その弟子がお茶の水に「順天堂」を開くことになります。

この佐藤泰然という人は面白い人で、長男を松本家に養子に出します。この人は**松本良順**と言われ、幕末に活躍した蘭方医の一人です。泰然は自分の後は弟子で一番よさそうな**佐藤尚中**に継がせます。

松本良順は松本家に養子に入った後、いろいろ理屈をつけて長崎に行き、そこでポンペに医学を学んで幕府の西洋医学所頭取をつとめ、戊辰戦争では幕軍に従って会津若松に行き、会津落城の後脱走して仙台、横浜に行き、自首して出ます。釈放後開業しましたがその後明治政府に仕え、結局軍医総監という当時医者としては最高の地位に着きます。

また、**関寛斉**という人がいて、現在の千葉県東金市の百姓の出身でしたが、銚子の醤油屋の社長で浜崎梧陵という人に見込まれ、佐倉の順天堂で勉強し、さらに「お前はもっと勉強してえらくなれ」ということで、長崎でポンペに学びました。

関寛斉はその後徳島藩の医師となり、戊辰戦争では会津若松を攻める官軍に従い、茨城方面を進軍する野戦病院の病院長を務めます。

もう一人、徳川幕府最後の将軍・徳川慶喜の侍医をつとめた**高松凌雲**という人がいます。この人は蘭方医で、たまたま慶応元（1865）年、パリで万国博覧会が開かれると、侍医として将軍の弟昭武に同行します。その後パリで外科の勉強をしていたところ「幕府危うし」というので急遽帰国します。帰ってみると徳川慶喜は謹慎の身となっており、幕軍の榎本武揚に誘われて兄とともに函館に行き、函館戦争では戦病兵の治療に努めます。敗戦後捕らえられた後釈放され、明治政府に仕官を要請されます。しかし兄は函館で戦死しており、自分は明治政府に仕えることは絶対にいやだと断り、東京で開業し、最後まで意志を通しました。

激動期というのは面白いもので、生まれがよかった松本良順は幕軍側から寝返って官軍側の明治政府について最後には子爵となり、大磯に引退し、立派なお墓があります。幕府の最高位にあった医者が明治政府に仕えてこんな立派なお墓に眠っている。

榎本武揚や勝海舟はいずれも江戸っ子ですが、何か要領がよくて明治政府について出世しました。松本良順もそうですが、いくら出世してもこのような生き方にはいささか抵抗がありますね。

ところで東京、三ノ輪の円通寺というお寺に黒門があって、弾丸の跡が残っ

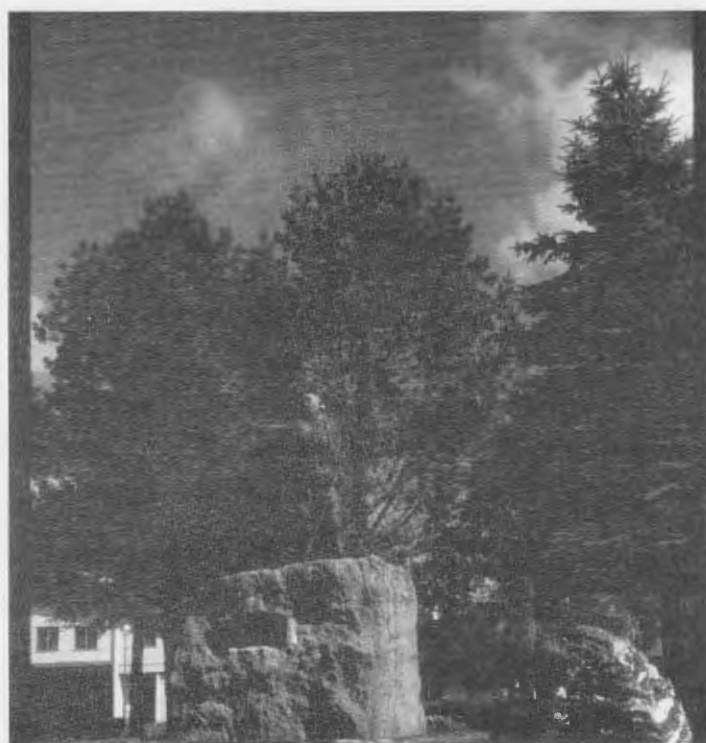
ています。この黒門は上野寛永寺にあったのですが、彰義隊の死体をこのお寺の住職が供養したのでここに移されたのです。この黒門のすぐ裏に函館・五稜郭にたてこもった榎本武揚や高松凌雲や、幕末の徳川将軍に尽くした人たちの碑があります。

また、パリのノートルダム寺院の右前方にオテル・ディユ (Hotel Dieu) という病院があります。オテル・ディユは神様の館という意味で、アンブロアズ・パレもここで勉強し、高松凌雲もここで勉強しました。

凌雲は福岡県の田舎（現在の古飯市）の出身で、当時では外国で学んだ唯一の外科医でした。明治政府からかなり誘いがあったのですが、「二君に仕えず」ということであることを聞かず、一生下町で開業医として過ごしました。この人の墓は谷中の墓地にあります。

余談ですが、高松凌雲の娘さんの旦那さんが三輪徳寛先生という千葉大学の最初の外科教授です。

上述した医師の中でも関寛齊は一風変わっていて、なぜか人気があります。明治時代になって、ともかく当時は官軍の病院の総監督の一人でしたが、明治政府に仕えるのはいやだというので徳島でしばらく開業していました。徳島で病院長をしたりしましたが、すぐに上司とけんかをしてしまうのです。72歳のとき、何を思ったか財産をすべて売り飛ばし、北海道の陸別というところの開拓移民として移住します。結局ここで亡くなります。この人の銅像はこの北海道・陸別の他に、徳島市、生地の千葉県東金市と2ヶ所があり、いくら偉い人でも3ヶ所にも銅像のある人は少ないと思います。



北海道・陸別は日本で最低気温を記録する阿寒湖の西に位置する山間の小さな町で、いまそこに行く鉄道は第三セクターになっていて、その陸別の駅に関寛齊の資料館があります。

この関寛齋や松本良順のことは、司馬遼太郎が「胡蝶の夢」という小説に書いていて、この資料館には司馬遼太郎の色紙が見られます。彼はちゃんとここに行っているのですね。

ここまで幕末の複雑な時代の中の代表的な外科医の話をしました。

一人はシーボルトの弟子の伊東玄朴で、彼は神田・お玉が池に「種痘所」をつくり、これは東京大学医学部の基になりました。

また長崎に学び、大阪で「適塾」を開いた緒方洪庵、江戸そして佐倉で順天堂を開いて弟子を育てた佐藤泰然がいました。その弟子の関寛齋は長崎でポンペに学び、官軍の野戦病院長をし、徳島で開業後、最後は北海道で死にます。この関寛齋という人は泥臭いところがあって、結局は組織の中で我慢することの出来なかった人ですね。72歳のとき北海道に渡り、83歳のとき明治天皇の崩御とともに自害しています。

佐藤泰然の実子の松本良順は長崎でポンペに学び、幕府の西洋医学所頭取になり、戊辰戦争では幕軍とともに若松に行き、明治時代になるとかつての敵軍の政府に仕え、医師の最高位につきます。高松凌雲はフランスに留学した外科医の第1号でパリで学び、帰国後函館で幕軍につき、明治政府になっても自分の節を曲げず、最後まで「二君に仕えず」を守りました。

戊辰戦争のときの戦略図を見ますと、皮肉なことに松本良順は幕軍につき、会津若松にたてこもる。関寛齋は官軍の野戦病院長。もう一人、佐藤泰然の養子の佐藤尚中は宇都宮方面から攻める官軍に従軍している。もう一人イギリス人のウイリスというイギリス大使館付きの医者は、新潟方面の野戦病院長をつとめています。高松凌雲は幕軍とともに函館にいます。このように当時の一流の医師たちも敵味方に分かれて対戦したことになっています。

明治時代になってどうなったかということ、関寛齋は徳島で開業し、北海道・陸別に渡って最後を遂げる。高松凌雲は江戸で開業する。松本良順はかつては敵だった明治政府に仕えて出世します。佐藤尚中は後に「順天堂大学」をつくり、ウイリスは官軍のために働き、当然明治政府はこの人を一番厚遇しなければならない。日本の医学の指導的立場に立つべきだった。ところが明治政府はドイツ医学の導入を決めたのでウイリスは行くところがなくなって、結局西郷隆盛が面倒をみて鹿児島で教育にあたった。

このように、当時の医師たちも時代の波に翻弄されたわけです。

いろいろ述べましたが、ともかく外科医という仕事も大変なものです。また一人一人それぞれの人生があるということです。

アンブロアズ・パレが王様の手術が必要だと迫ったように、必要な時には先ず自分の職業をやり抜こうとする、プロフェッションとしての決意が必要だと思います。そして、これは何も外科医に限ったことではありませんが、自分の良心に従いやるべきことは決然とやる。あとはアンブロアズ・パレの言葉のように、「私が処置し、神が治し給うた」という気持ちが必要だろうと思います。

御静聴有難うございました。

[質疑応答]

Q: 私どもは医学というとドイツが主流だと思っていましたが、お話をうかがうとフランスの影響がかなり大きいようですが、いかがでしょうか。

A: 実際には19世紀頃までの臨床医学では、フランスが世界的に一步リードしていたと思われます。20世紀に入るとドイツ医学がかなり伸びてきて、特に基礎医学ではドイツが優勢でした。そして当時の明治政府ではどこの医学を入れるか迷いました。オランダ医学はもともとドイツから伝わったものだという認識はあって、アメリカはまだ若い国でしたから、イギリス、フランス、ドイツが考えられたと思います。フランスは当時ドイツと戦って不利な状況にあり、しかもフランスは幕府を支援していました。薩摩と長州の対立もあり、イギリスは薩摩とつながりがありました。結局ドイツは当時国力、医学共に次第に力をつけつつあったことで、ドイツを選択することになったわけで、当時としては正しい選択であったと思います。

Q: 森鷗外が軍医総監だったそうですが何代目ですか。

A: 軍医総監というのは軍隊の階級だけではなく役人としての最高の位のようなのですが、今は軍医総監という位はありません。森鷗外は恐らく最後の頃の軍医総監だったのですが、何代目かは知りません。

Q: 床屋の看板は青と赤の線になっていて、あれは動脈と静脈だそうですが、外国でも看板は同じですか。

A: 赤が動脈、青が静脈で、白が包帯だというのですが、正確なことは調べてないので分かりません。これも一度調べて見たいと思いますが、外国ではどうですかね。

齋藤支部長

森岡先生の著書で、「近代外科の父・パレ」という本がNHK ブックスの中にあります。実は今日皆様にお土産に差し上げたかったのですが、NHK ブックスに問い合わせたところ在庫が無いのです。図書館ならあると思いますので、ぜひご覧ください。

千葉城北会の発足・四中の思い出・戦争体験

田村耕三氏（S16）

この原稿は平成17年4月24日、市川市男女参画センターにてインタビューしたものです。

田村耕三氏経歴 昭和11年 府立四中入学
昭和16年 同 卒業
昭和22年 慶応大学卒業

千葉支部第1回総会までの経緯

発起人は高浦敏明氏

最初に申し上げなければならないことは、この千葉城北会の結成は高浦敏明氏（昭9）の並々ならぬご苦勞の賜物であったことだ。高浦氏という方は、誰から命じられたわけでもなく、無からのスタートで、この千葉城北会の立ち上げのためには心血を注いだ方だ。誠に心を打たれるものがあった。

高浦氏が今日このように盛大な会に発展できたことを知らずに昭和40年代の後半に死去されたことは本当に残念である。

高浦氏の住所は千葉駅からバスで30分、当時は比較的不便なところだった。

記憶では昭和40年春頃だったと思う。私のところにある日突然、まったく見ず知らずの人から、「船橋駅近くの喫茶店で会いたい」旨の葉書が届いた。私は高浦氏のことを知らなかったのでびっくりした。しかし、先輩の言うことだから言うことを聞かないわけにはいかない。「何で呼び出されたのだろう」と不安な気持ちで出かけていった。行ってみると「実は、城北会を創設したいので協力してくれないか」という話だった。そこから始まった。最初に高浦氏は、卒業生が比較的多い市川から船橋の間に目をつけられた。そこを集中的に呼びかけたいという話だった。

その後、高浦氏の自宅に来るように呼びかけがあり、高浦氏の近所に住む渡辺康義（昭13年卒、千葉大学名誉教授）と高浦氏と私の3人が集まった。この3人がそもそもの立ち上げの発起人といっているだろう。それぞれ勤務があったので日曜日に集まった。

そのとき決めたことは、卒業生名簿から総武線沿線（千葉—市川間）在住の

者に案内状を出すことで、文面は高浦氏に一任することにした。文面は恐らく「城北会設立」とは書かずに、挨拶程度だったと思う。

高浦氏が名簿を見て、一人一人に挨拶状を郵送した。宛先不在で戻ってきたときは、名簿から抹消し、届いた人を城北会の会員とみなして高浦氏が大切に記録した。

昭和41年4月に初顔合わせ

千葉城北会の誕生のために大変有効だったのは、最初の「顔見せ」だった。

名簿はできて高浦氏自身が相手の顔を知らない。そこで、いちど顔合わせをしなくてはというので、1か月後に再び高浦氏の家を集まり、朝10時から午後3時ころまで相談した。そこで決めたことは、城北会会員とみなした者の顔見せの会合をすることだった。場所探しは私に一任された。誰が来るかもわからない、人数もわからない、費用もかけられない。そこでお金のかからないところで設営した。

◆最初の会合

日時：昭和41年4月5日 午後1～3時

場所：船橋商工会議所会議室

会費：無料

「顔見せに来てください」という葉書を高浦氏が出した。

飲物・食べ物いっさいなし。会場にあったお茶だけで済ませた。

そのときに集まった人たちが、後に高浦氏の力になってくれたメンバーだ。

なかでも最年長は明治43年卒の斉藤斉（さいとういつき）氏だった。この人が挨拶をしたので、「うわ～、明治の人か」と私も驚いた記憶がある。

高浦氏の記録では“有志13名”となっているが、これは恐らく通知を出したのが13人ということだろう。お互いに見ず知らずなのでそれほど集まるはずがない。

後に活躍する川村秀文（大5）氏なども初顔合わせのメンバーだった。

そのときの先輩でもう一人、大森寛氏（大14）という方がおられた。城北会の代表に誰をするかというときに、斉藤氏ではいかにもご高齢なので、高浦氏と私の二人で大森氏の自宅へ行って、城北会設立の趣旨をご説明して協力を仰ぐことにした。そのときはお留守で会えなかったので、後でお願いした。

私事になって恐縮だが、このころから私の勤務する会社が左前になって日曜にも出勤せざるを得なくなり、高浦氏に、「お一人でやってもらうのは恐縮ですが、こういう事情でご協力できないのです」と説明して、私はそこで別れることにした。その後のことは城北会千葉支部会誌で拝見するまで知らなかった。

会誌によるとその後も高浦氏の名前が出ているので、活動を続けておられたのだろう。

残念なことに、高浦氏は昭和 40 年代に亡くなられている。会誌の「千葉支部第 1 回総会」のところには名前が出ているが、その後彼の名前は消えている。私は当時、発起人から外れていたので高浦氏の死を知らなかった。千葉支部創設までは高浦氏もここにあるメンバーと一緒に活動していたのだろう。そこまでの経緯はよくわからない。

発起人 13 人で支部結成

昭和 42 年の最初の会合の時にはすでに戸山高校の卒業生もいたが、若い人は参加しなかった。なにしろ昭和 9 年卒の高浦氏からの呼びかけなので、集まったのは大正から昭和 1 桁卒業の人たちが中心で、今思えば錚々たるメンバーだった。昭和 16 年卒の私など一番若い方だった。そのとき初めて顔見せとして集まったのが創立総会の発起人 13 人ということになる。以後はこの 13 人を頼りに高浦氏が進めたので、順調に進んだと思う。

高浦氏の功績

私が特に強調しておきたいのは、高浦氏の功績だ。名簿を一人で繰って一人一人案内を出す作業は並大抵のことではなかった。私は発信人である高浦氏の住所氏名を書くお手伝いはしたが、宛名は高浦氏が一人で書いた。

1 回目の手紙を出して宛先不明で返ってきたのを除いて、次に案内を出すときに渡辺氏と私で封筒の宛名書きをした。何通出したかは記憶にない。

そこまでの費用は高浦氏がすべて自腹を切っていたと思う。我々ももちろん交通費は自腹だった。とにかく財源がないので請求するわけにはいかない。それ以上に高浦氏のかけた費用と労力は大変なものだったと思う。当時、高浦氏は公務員だった。後に財団法人・千葉港湾福祉厚生協会というところに勤務された。皆に出した手紙の印刷は、自分のお役所でやったのではないかと思う。

今考えると、この最初の「顔見せ」が有効だったように思う。最初はあてずっぽうに送ったが、確認できたあとも会費はとれないので、ただでできるところを探して、そこで顔合わせしたのがこの 13 人だった。

当時、高浦氏は「俺の同期には長田裕二（元参議院議長）といういい奴がいるんだ」とよくいっておられた。私も長田氏にお会いした記憶がある。しかし、その方から資金の提供を受けたということはないと思う。

四中時代の思い出

私が四中への入学したのが昭和11年。卒業が5年後の昭和16年。陸軍士官学校や海軍兵学校へ行く人、一高へ行く人は、みな4年からいった。まだ空襲前だった。

入学した時は深井鑑一郎氏が校長で、大変厳しい人だった。あだ名が「オニ」といった。しかし我々とじかに話すことはなかった。先生方がみな深井校長を恐れていたのではないか。先生に対して厳しい校長だった。

確か3年生の時に西浦校長に代わった。

四中は忘れ物と遅刻には大変厳しい学校だった。忘れ物を3回すると「遺忘(いぼう)」といって成績に影響した。入学したころは要領がわからないので「忘れました」と正直に先生にいう。だんだん上級になるとずるくなって、他のクラスから借りてきてごまかすようになった。そのかわり向こうが忘れてときはこっちが貸してやった。

もう一つは遅刻だ。校庭で朝礼をやる時間になると裏門が閉められる。裏門が閉められればどうしても表門から入らざるをえない。そこで「遅刻」を記録されてしまう。これだけはズルする方法がなかった。

服装についても厳しかった。冬でもオーバーを着ることが許されなかった。上級になると学校の近くまで着てきて、馴染みの洋服屋にポンと投げて登校したものだ。

冬でもポケットに手を突っ込まないように、学生服もズボンもポケットがなかった。

カバンの掛け方も、行きは右、帰りは左というように変えなければならなかった。

特に厳しかったのはやはり軍事教練だった。支那事変から戦争の旗色が悪くなると、軍事教練が科目になり、配属将校から教育を受けるようになった。軍事教練は週2時間、体育の授業がそれに代わった。配属将校ともう一人は予備役軍人(元軍人だった人)だ。この教官が厳しかった。教練ばかりでなく、普段の行動でも何か気にいらないと呼びつけられてどなられた。先生が注意しないような服装や礼儀など細かいことまでぐずぐず言った。学校には軍人の部屋があって、授業があってもその部屋に呼び出されて、「おまえ、なにやっているんだ」としかられた。これに対して先生は止めてくれというようなことは言えなかった。生徒は常にびくびくしていた。先生が「〇〇くんいないけど、どうしたんだ」というと、級長が「〇〇くんは軍人によばれています」と答える。「何か悪いことでもしたのか」と先生がいうと、「そうですね」というようなやりとりがよくあった。かまわず授業は進められた。配属将校の関中佐が一

番厳しかった。「セキチュウ」ともいったが、別名「ブル」ともいった。ほっぺたがたるんでブルみたいな顔をしていた。だから四中にはブルが2匹いた。

四中での遠足は3年生で終わった。以後は遠足と称する軍事教練で、習志野や富士などへ出ていった。多かったのは習志野だった。広大な教練場だった。

四中ではときどき出し抜けに試験をされて、その成績が悪いと「居残り」させられた。なにしろ他の先生が講義をしているところに入ってきて、居残りを告げられた。例えば漢文の試験をやっているときに、数学の試験の悪い者を残すのに、「先生、ちょっと失礼」といって割り込んできて、「次の者は居残り」と告げられた。そうしないと授業が終ると生徒が帰ってしまうからだ。それを逃がさないために他の授業に割り込んできた。居残りになるとまた試験問題を出されて、それができるまで帰されなかった。出来の悪い生徒は鞭でたたかれた。誰も文句はいえなかった。

生徒間の対抗意識で記憶にあるのは、「おい、ちょっとこれわからないから教えてくれ」といっても、「俺もわからない」といって教えてくれなかった。それでいて試験になるとそいつがちゃんとできたりした。いま思い出しても「あのとき教えてくれていれば苦労しなかったのに」とくやしく思うこともある。

私がなぜ四中を受けることになったのかよくわからなかった。父親がどこかで聞いてきたのだろう。市川だと三中（今の両国高校）が多かった。四中、一中などはいなかった。私が四中に入ると小学校の先生から「いやあ、お前はすごいところに入ったな。創立以来の優秀な奴だ」などといわれて悪い気はしなかった。

通学は市川から総武線でお茶の水まで行って、中央線に乗り換えて市ヶ谷まで行った。あのころは中央線にはまだ急行はなかった。すべて各駅停車だった。

学級は確か5クラスあった。甲、乙、丙、丁、戊で、私は乙組だったから割合優秀な方だった。

数学の柴田先生は「ガンマー」というあだ名だったが、由来は教室に入ってくるときの姿勢がよく、「γ」のような格好をしていたからだ。他に「時計」というあだ名もあった。時間に厳しかったからだ。

岩野先生は「フォックス」というあだ名だった。なるほど見ればキツネだなという感じがした。「ネギさん」はただ長いだけだ。それに比べれば「フォックス」の方は感じがでていて、あだ名をつける者はうまいこと考えるものだなと思った。

戦争体験

(1) 学徒出陣

4 中も大変だったが、卒業してからのの方がもっと大変だった。

昭和 16 年 3 月に卒業すると、その年の 12 月 8 日に大東亜戦争が始まった。その間、半年と少ししかなかった。

私は慶応の予科に進んだが、大学でまともな授業を受けたのは昭和 16 年と 17 年の半ばまでだった。それでも軍事教練があったので、そっちに多く時間をとられた。18 年の半ばには学生の徴兵猶予が切れて学生も例外ではなくなった。私もその年、徴兵検査を受けた。いわゆる「赤紙」という徴収令状がきたのが 10 月だった。

昭和 18 年 11 月の学徒出陣式は、今でもよくテレビに映るように、あの神宮外苑の代々木練兵場（後の国立競技場）で、ひどい雨の中で行われた。私もそのときに見送られる学生の一人だった。みな学業半ばの学生ばかりだった。

東条英機大將があの特徴の甲高い声で壮行演説を行った。

ゲートルに地下足袋で、背中まで泥水がはね上がった。

我々よりも大変だったのは見送りに来てくれた女学生たちだった。白いブラウスを着て、観覧席でずぶぬれになって立って見送ってくれた。全員がぬれぬれずみで、ぬれていないのは東条大將だけだった。

威勢のいい行進曲に送られて勇ましく出ていったが、考えてみればすでに負け戦であることはわかっていて、ほとんどは特攻隊要員だった。出陣式に参列した者はみな列車で門司に運ばれた。米軍はスパイを送り込んでいて、門司から兵隊を積んだ船が出るのが分かっていた。朝鮮へ渡る部隊はここを狙えば一網打尽なので眼をつけていた。だから夜に博多まで移動して、博多からまた夜、釜山へ渡った。朝鮮半島に渡ってからは列車に乗せられた。行き先も告げられずにただひたすらに北へ向かった。途中で車両を切り離しながら進んでいく。いったい何処まで連れて行くのだろうと不安だった。私の乗っている車両はたった 1 両、最後まで残った。結局、一番奥の会寧（カイネイ）だった。長い旅だった。会寧というのは、満州との国境沿いの朝鮮最北端の町だった。着いてみると猛烈な寒さだった。私は歩兵として、会寧で 12 月 1 日に入隊した。朝鮮に渡ってからはさすがに空襲はなかった。

5 か月経つと、こんどは航空の方に強制的に回された。昭和 19 年 4 月に内地に戻ってきた。そのときのほとんどは特攻隊要員だった。すでにフィリピンがやられ、沖縄もやられたので、朝鮮から回せということのようだった。私は眼が悪かったので整備の方に回された。眼がよければ特攻隊員になっていたかもしれない。私の同期で特攻隊になって飛び込んだ人が何人かいる。

回された学生がみな特攻隊要員であることは見え見えで、「いやな者はいやと言え」「具合の悪い者は申し出ろ」といわれたが、「いやだ」とか、「私駄目です」などと言う者は一人もいなかった。「よし、全員賛成だな」というような調子だった。まさに消耗品だった。

私は幸い整備士だったものだから、空襲を受けることはあっても、戦闘に加わって弾の下をかいくぐったことはなかった。

(2) 戦闘機の整備士

私は終戦まで特攻機の整備士として各地の飛行場を転々とした。最後は山口県の防府というところだった。アメリカは特攻隊の出陣基地として鹿児島県の知覧を集中攻撃した。だからあそこでは整備できなかった。違うところで整備して知覧へ送った。防府へは霞ヶ浦などから飛行機が飛んできた。見ればまだ17～18歳の少年が操縦している。本当に可哀想だった。

防府には飛行場があって滑走路があるから、米軍の艦載機（航空母艦から発進してくる戦闘機）が狙ってやってくる。爆撃ではなく機銃掃射だった。だから危なくて飛行場には飛行機は置けなかった。近くの田んぼに引っ張って行って、それに屋根をかけてごまかした。そこまで行く途中が危なかった。そのときにちょうど米軍機がくると、逃げ出したいが逃げられない。なぜなら「お前は飛行機を放置して自分だけ逃げたのか」と後で罰せられるからだ。逃げないで飛行機のそばで身をひそめて小さくなっているしかなかった。

そんな危険な目にあいながらも私は無事だった。可哀想だったのは、学徒動員で格納庫などで作業をしていた女学生だ。米軍機は格納庫だから、当然その中には飛行機があるだろうと攻撃をしかけてくる。犠牲になったのはほとんどが女学生か女子工員だった。すでにそういうところに男はいなかった。

日本にはすでに迎え打つほどのエネルギーがないので、空襲警報が鳴ると飛行機は迎え撃つどころか、北へ向かって逃げた。敵機が来るたびに日本海の方に逃げた。なけなしの飛行機だから1機たりとも無駄にはできなかった。だから空襲は向こうのやりたい放題だった。操縦士の顔が見えるほど近くまで降りてきた。そんな調子だから勝てるわけがない。

3月10日の東京空襲あたりで日本は手を上げるべきだった。そうすれば沖縄は残った。とことんまでやるから広島、長崎まで原爆でやられてしまった。当時は何も言えなかったが、負けるだろうということはみな思っていた。

防府で飛行機を整備していると、飛行機が足りないので飛行機をつくっているとところへ行って整備するようにと栃木県宇都宮の中島飛行機に行かされた。飛行機をつくっているとはいっても、つくっているのは胴体だけだ。エンジン

は名古屋あたりでつくっていた。米軍もそのことを知っていて、エンジン工場は爆撃したが、胴体をつくっている宇都宮は爆撃されなかった。

エンジンが足りないので、試験飛行で墜落した機体からエンジンを外し、また新しい機体に取り付けるようなこともした。だから、危なっかしい飛行機ばかりだった。太刀打ちできるような状態ではなかった。

昭和20年3月10日の東京大空襲の日も私はその宇都宮の中島飛行機にいた。翌日、整備する飛行機もないので帰宅しようと東京へ向かったが、空襲の直後だったので汽車は赤羽までしか走らなかった。赤羽から平井まで不通だった。しかたなく、赤羽から歩いて、新小岩の鉄橋を渡って家に帰った。そのときに焼け跡の惨状の中を歩いた。それはひどいものだった。焼け死んだ人の炭化した死体もひどかったが、当時東京には馬がたくさんいて、空襲でやけるとあの大きな馬が犬のように小さくなっていたのが特に印象に残った。一見何だかわからないが、よく見ると馬だった。その小さい馬があちこちにごろごろしていた。

(東京大空襲は昭和20年3月10日の未明だった。たった一晩で約10万人の市民が焼け死んだ。熱いので川に飛び込みそこで死んだ者が多かった。後で川に浮かんだ死体を引き上げると、その下からさらに死体が浮かんでくるほどひどかった)

あんな無理な戦争をすることはなかった。支那事変をやったあげくに、また大東亜戦争でアメリカと戦うというのだから無茶な話だった。

(3) 復 学

終戦になってまた学校へ戻った。もどったときは出て行ったときよりも1学年上になる。昭和22年9月に卒業した。卒業といっても何も勉強していない卒業生だった。

学校といっても先生が買出しに忙しくほとんど留守だった。とにかく配給米だけでは食べていけないので、先生が留守なのも無理はない。家が空襲でやられた先生は田舎へ帰ったきり出てこない。

わずかに出てきた先生は、いくつものクラスを合併させて教えるより仕方がなかった。それもまたすぐ帰ってしまう。図書館は空襲でなくなり、神田の本屋もない。だから学生生活とはいってもみじめなものだった。

「今日は休講だ」というので、アルバイトに精を出した。学校を卒業する前の半年間は経験を生かして漁船のエンジン整備のアルバイトをした。

マンションの耐用年数と維持管理について

城北会千葉支部支部長 尾崎 英二 (S31 卒)



大学を出て 45 年程建築の設計監理の仕事をしているが、ここ 10 年程前から新築の建物の設計の他にマンションやビルの大規模修繕のための改修設計の仕事が増えて来ている。

1 年前から N P O 法人マンションオーナーズコミュニティーのセミナー講師を頼まれて月 1 度のペースでマンションの管理組合の役員等に対して建物のメンテナンスについて技術的な内容を説明している。

その時に参加者よりいろいろと質問が出て、一般の方の建築に対する認識が我々建築家とかなりくい違っていることに気がついたので主な内容について説明してみたい。

質問 1. 築 15 年位のマンションを購入したいが今後一生住むことができますか。
(30 代女性)

建物の物理的耐用年数

躯体 (コンクリートなどの骨組)	70 年以上
配管設備	25 年～35 年
造作 (内部仕上) サッシ	25 年～35 年

これが建築界で一般的に云われている耐用年数である。

建物はメンテナンスにより耐用年数が異なって来る。

東京駅前の丸ビルは社会的な寿命で取り壊されたが躯体のコンクリートは 70 年経過しているにもかかわらずアルカリ性が保たれてお

り、まだまだ十分に使用に耐える健全なコンクリートであったと云う。

世間では一般的に 30 年を経過するとそろそろ建て替えなければいけない等と云われているが決してそんなことはないのである。

質問 2. マンションの大規模修繕は 10 年毎にやらねばならないのか (40 代男性)

第 1 回目の大規模修繕 (築後 12 年目頃)

入居時の姿に戻す

第 2 回目の大規模修繕 (築後 24 年目頃)

その時点での最新のマンション並みにグレードアップする

(オートロック等)

第 3 回目の大規模修繕 (築後 36 年目頃)

躯体を残して全面改修

これは建築界での一般的な目安である、私が住んでいたマンションでも第 1 回目の大規模修繕は予定の 12 年目を経過した後、毎年建物の状況を修繕委員会のメンバー (私が委員長) でチェックした上で 16 年目で第 1 回目の修繕を行いました。

現在改修の設計監理をしている大宮のマンションは 18 年目にして第 1 回目の屋上防水工事の改修工事を実施している。

ある宗教団体で施設管理のメンバーに対してセミナーで説明したところ、この団体の教会の建物は 10 年に 1 度必ず大規模修繕 (外部、内部共) を行っていると聞き、おどろかされた。

何故そのようにしているかとこちらから伺うと防水の保証期間が 10 年だからそのように決めたということであった。保証期間が 10 年であっても、実際は 15 年でも 20 年でも大丈夫であって、あくまでも現場の状況を見て判断すべきであると説明した。

10 年目毎に全体の修繕を繰り返せば予算がいくらあっても追いつかないのではないか。

質問 3. 築 17 年のマンションであるが管理会社からそろそろ給水管の取り替え工事をしなければならぬ、については工事費が 2 億円 (300 戸のマンション)

かかると言われて困っている。本当にその必要があるのか (70 歳代

男性)

給水管交換工事の必要があるかどうかは第3者の設備設計の専門家が調査した上で判断すべきである、管理会社からの報告だけで決めるべきではない。

給水管の腐食対策方法としては管内ビニールコーティング方式、磁気水処理装置の取付等がある。管内ビニールコーティング方式は管内特に一番の弱点であるエルボ部分（配管の曲がり部分）に完全に塗装が施工されるか疑問であるし、そもそも飲料水が通る部分に化学物質を加えることが問題であると思う。

磁気水処理装置は受水槽などの手前にカプセルを設置して、そこを通る水が磁気を帯び、その水が通ることにより鉄部の赤錆が黒錆に変わり、それで安定するために結果として配管の寿命が延びるのである。

私は10年程前からこの方法を実施している。

黒錆に変わったかどうかの確認は配管内にカメラ入れれば分る、しかし定期的に行われる水質検査の項目に鉄分の検査項目を加えておけば鉄分が減っていることが分かる、即ち黒錆化して安定しているのか数値で確認出来る。

今迄述べて来たように建物の寿命は30年や40年という短いものではなく、適切なメンテナンスを行うことにより70年でも80年でも安全に使用出来るということを、次世代の人達にも伝えたいと思い、本文をまとめた次第です。ぜひ何かの機会にお子さん達にこのような考え方を伝えていただければ幸いです。

平成 17 年度城北会千葉支部懇親総会

特別講演

「日中異文化おもしろ講話

— もう中国ビジネスは怖くない」

日時 2005年11月12日(土)・13:00~14:00

会場 八幡会館 (市川市八幡4-2-1)

講師 三瀨 正道 氏 (麗澤大学教授)

【講師プロフィール】

三瀨(みつま)正道。昭和23年生まれ、都立戸山高校昭和42年卒。
東京外国語大学大学院修士課程修了。現在麗澤大学中国語学科教授、立教大学
講師等。日中異文化コミュニケーション研究会代表世話人。日中翻訳プロ養成
組織、而立会を主宰。(株)海外放送センター顧問。

MMメソッドと呼ばれる独自の中国語教育システムを考案。時事中国語研究の
専門家としても知られる。日中異文化コミュニケーション論と、それに基づく
現代中国分析には定評があり、中国進出企業で多くの講演をこなしている。

著書に「現代中国拡大鏡」、「現代中国トピックス」、「現代中国13の素顔」、「現
代中国走馬看花」、「知りたいことがしっかりわかる実戦中国語文法」、「MM式
中国語必要会話777」など多数。web上で毎週(月)更新の時事問題解説コラ
ム<現代中国拡大鏡>を連載中。

(<http://www.chinavi.jp/koramu.html>)

【講演内容】

添付レジメをご参照ください。

補 - 1/2

日中異文化おもしろ講話—もう中国ビジネスは怖くない！

1. ところ変われば

- * “寿店”、“寿衣”って何のこと？
白地に寿で結婚祝い？とんでもない！
- * “我孫子”行きには乗りたくない？
最悪は「7代前の先祖をレイプする！」

2. 法律から身を守る？

- * 自己防衛の社会システム
 - ① “昇官発財”
科挙—留学—博士、忘恩負義の徒にはなりたくない。
 - ② 賄賂は甲斐性
族長の最大の義務を果たそう！
 - ③ 秘密結社
中国史は裏から見れば結社の歴史。

3. 中国社会の通過儀礼—宴会

- * “自己人”と準自己人と赤の他人
眼もくらむ落差に要注意
- * “煙酒不分家”
タバコとお酒は最大の道具。
- * “乾杯、半杯、随意”
相手から眼をそらさずに！

4. 中国人的論理と行動—日本人ビジネスマンの誤解を解く！

- ① 中国人は勝手な理屈をこねる？
実利主義と“胡説八道”。中国は薄皮饅頭。
- ② 法律が当てにならない？
国務院の“意見”—法律の試行—法律の施行—実施細則。
- ③ すぐ手抜きをする？
給料はおおっぴら。QC大好き！
- ④ 給料が高いほうにすぐ転職する？
給料が安くても辞めないのはなぜ？能力主義は筋金入り。
- ⑤ おごってもらって「安いね！」とは無礼なり！
「お客は渋い顔で送り出せ！」、「討価還価」
- ⑥ 契約を守らない！
先にお礼か、後でお礼か？
「ちょっとそこまで」と“特意来了”

結語：日中異文化コンフリクトは「相手を気遣う文化と誠意を示す文化の相克」

◆投稿のお願い

城北会千葉支部会誌は、毎回、定期総会に合わせて年1回の発行を予定しています。皆様の投稿をお待ちしています。

学校時代の思い出、現在の仕儀と柄感じること、教育についての意見、趣味、随想等何でも結構です。

投稿は毎年9月末までをお願いします。

投稿は下記事務局まで、郵送、Eメールにてお願いいたします。

住所、氏名と四中・戸山の卒業年次のご記入をお願いします。

城北会千葉支部会誌 第2号

平成17(2005)年10月発行

発行：城北会千葉支部

支部長 尾崎 英二 (昭29)

副支部長 斎藤 徳浩 (昭34)

副支部長 本橋 輝明 (昭34)

顧問 齋藤 和子 (昭29)

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 276-25

本橋 輝明

電話 090-6021-7397

E-mail: mteruak@attglobal.net